

連続ワークショップ 『フィールドサイエンスと超域的ネットワーク』第2回「フィールドワークと理論構築」

2006-06-24 於A A研

「フィールドワークは理論を作れるか、あるいはフィールドワークと理論の関係について：人類学の場合」

内堀基光

0 はじめに

0-1 わたしは実は「フィールド」ワークはやっていない。

ボルネオでもマダガスカルでも、現地調査の大部分は屋内であった。

短期間の場合は、ということはこの四半世紀はずっとそうなのだが、「いそうろう」、若いときの唯一の長期研究のときのみ、自らの小屋を持って暮らした。ごきぶりに背表紙をかじり尽くされたハイデガー「存在と時間」。

研究室、実験室、書斎の外が、すべて「野」なら、たしかにそこはフィールドだが、わたし自身は、こういう言い方には、長い間、抵抗感があった。

フィールドサイエンスというくくりがどこまで有効かは分からないが、人文社会系の場合、ほんとうに「野」で働く分野は、発掘調査を行なう考古学=先史学か、生態人類学、あるいは相当の歩数を譲って人文社会系なるものを大きく取り、梅崎さんのような人類生態学、霊長類生態学の分野しか考えられないであろう。

それでも、文化/社会人類学者は、みずからの仕事のある局面をフィールドワークと呼び、また単に呼ぶだけでなく、それをみずからの仕事を隣接分野から分かつ境界マーカーとしている。

あえて「理論」と言わず、今日の文化人類学の基幹的問題はここから出発しているように思われる。

フィールドワークそのものについての理論の貧困。

1 人類学で問題になるのはどういった種類の理論か

1-1 人類学の現地調査を、なぜ「フィールド」ワークと呼んだのか

「海外」学術調査ということ：これはいわゆる「フィールド」に限定されない。だが文化人類学においては、それはどうしてもフィールドワークとエスノグラフィーのセットと切り離せないようなので、それに限定して話しをする。

このセットはほぼ自明視されているものである。Ethnographic writing に帰結しないフィールドワークは「今や」考えにくいという状況。そしてフィールドワークをするのが人類学だとすると、これが人類学を狭めることになる。

このことは、Writing Culture, 1986 の諸論文でははっきりしている。

「ライティングカルチャー」からの時間
調査者の権威と権力

しかし Anthropological Locations, 1996 となると、フィールド自体を問題にしてい

る。

ここで、**generalist-comparativist**(Radcliff-Brown, Leslie White, George Murdock) に対し、フィールドワーク派 (Malinowski, Boas, Evans-Pritchard, Leenhardt) という対比。

Naturalistic な活動として開始された人類学フィールドワーク
伝統的な (エグゾティックな) フィールドと新しいフィールドのちがい。

その後 10 年の展開は知らない。

1-2 人類学の理論の弁別

記述のための理論 (おそらく、これが解釈と称されるもの)

記述 = 解釈理論の性質について

これを **implicit** にするか **explicit** にするかで分かれる

定性的データと定量的データのちがい

自然科学者にはまったく理解不能だろうが、定量データをとることへの批判的な視点、というものすらあるということ (cf. Pratt in Writing Culture)

説明のための理論

一般的に言って、民族誌学において説明理論はフィールドからは生まれない。

説明理論はフィールドデータの整理のためか 必ずしもそれだけではない。

説明理論をフィールドにひっさげて行った場合、理論の検証ということ

説明理論は **explicit** に提示されざるをえない

中範囲説明理論における還元レベルの設定

だがこれは、フィールドワーク民族誌に限ったことではない

1-3 エスノグラフィック・フィールドワークのありよう

では記述 = 解釈の理論はフィールドから「生まれる」のか

いわゆる「参与観察」について

人との出会いのなかで、研究自体が変わること (というか、そういう語り口が多い)

フィールド前の予期、とフィールドにおける発見

フィールドワーク中と、フィールドワーク後

それでもやはりフィールドワークは「コンヴェンショナルな調査実践」である。

1-4 大理論は過去のものか、大理論は何のためか

大理論は説明というよりも、ナラティブ設定枠 = **master paradigm**、メタ説明理論であること。メタ説明と説明は **sequential** に連続する。

たとえば、「進化」(や「認知」) といった理論枠とフィールドワークはうまく切

り結べるか。

いわゆる「文化理論」、「批判理論」はどうか。

これらはナラティブ設定枠にはなりえない。メタ記述理論ではある。しかし記述のためのタームは提供するが、記述と sequential にはつながらない。

だが、大理論は、最終的には調査の蓄積のなかに、その構築の萌芽がある

2 フィールドワークと民族誌について、私の場合どう考えてきたか

2-1 1983「人類学の最前線」の「若手」座談会から23年

具体的なものとはなにか（具体としての個）
対象としての「文化」への疑義

2-2 1985「ヘルメス」のエッセイから21年

慣れの問題
transference と countertransference
フィールドワークにおける危機

2-3 1995「耐用年数」から11年

フィールドワークにもとづく民族誌研究の意義の終焉とも見えること

2-4 それで、今は？

日本人若手研究者のフィールドワークは、欧米の Ph.D. Candidate たちに比べてきわめて長い。博論執筆のために丸2年の調査は標準的なもので、これに補充調査を加えるのが普通である。これに対して、（うろおぼえだが）だいが前の SOAS、LSE で1年強、今のアメリカでも同じようなものが多い。おそらく現地での言語的コミュニケーションは日本人研究者のほうが上だろう。だが理論面の展開はどうだろうか。

日本人の場合、「記述理論」が explicit でない場合が多い。Implicit にはもちろんあるのだが。「記述理論」といった場合、英米とりわけアメリカの研究者が、今もっとも流行の理論との対面で書くように要請されているのに対し、日本ではそうではない。「そうではない」は定義上、あまりにも多様なので、つかみどころ、がない。

それゆえに「日本人研究者には理論がない」と思わせるところがある。それは実はフィールドワーク＝民族誌のセットにおける理論の位置づけが異なる、ということなのだが。